

原 著

中動相の理解が聖書解釈にもたらす意義の一考察

古川 敬康

＜要 旨＞

新約聖書はギリシア語で書かれ、動詞の活用の相には能動相 (active)、中動相 (middle)、受動相 (passive) の3つがあるが、中動相は「ギリシア語に独特な相」であることから、「中動」(middle) という用語には何ら特別な意味はないとすらされてきた。しかし、その原因は「個人、人格、自由、責任」を前面に出すヨーロッパの思想・言語にとって、中動相の文法が論理的に曖昧と受け取られ、主語・述語、主観・客観の合理的な論理によって「論証」されないものは理解されない結果にすぎない。

改めて、中動相の背後にある歴史を振り返り、他の相との比較における特徴を浮かび上がらせたとき、中動相には固有の意味論的意義が認められる。それは、動作主の受影性である。この意味論的意義を実現する方法として、原型的他動性からの「ぶれ」があり、このぶれこそが中動相の命である。

しかし、聖書テキストも中動相を理解して解釈するとき、テキストの意味は異なってくる。中動相の重要性を認識し中動相を理解してテキスト解釈に臨むことの意義を示す一つの試論である。

キーワード：中動相、原型的他動性、動作主、受影性、被動者

1. 問題の所在と解決への方法論

新約聖書はギリシア語で書かれているが、動詞の活用は時称 (tense)、相 (voice)、法 (mood)、人称 (person) および数 (number) の区分に従って変化する。この相には能動相 (active)、中動相 (middle)、受動相 (passive) の3つがあるが、中動相は「ギリシア語に独特な相」¹ であるとされている。そもそもこの3つの相の名称は表現としてぴったりとしたものでなく (not felicitous)、「中動」(middle) という用語には何ら特別な意味はない (no particular meaning)² とされている。しかも中動相に対応する英語はなく、「解釈の一般的考え」を提供するだけで、その中動相の総体的な力を捉えることは出来ないことが言われている³。この点を端的に、H. E. Dana と Julius R. Mantey は、英語は近似的に類似なものを全く知らないの、英語の語彙で十分に又は正確に中動相を描写することは不可能であると述べている⁴。

このような不明瞭さの多い中動相に関して、國分功一郎による『中動態の世界—意志と責任の考古学』⁵

が出版され、國分は、元来、受動相はなく能動相と中動相とが対立的に存在し、受動相の源は中動相であり、その両者の関係は相対的であることを主張している。高橋勝幸はその書評で「この中動態の失われたことが東西思想対立の原因となる」⁶ と述べ、その失われた原因を、「個人、人格、自由、責任」を前面に出すヨーロッパの思想・言語にとって中動相の文法が「論理的に曖昧」と受け取られたことに見て取る⁷。すなわち、ヨーロッパの思想・言語の世界では、「主語・述語、主観・客観の合理的な論理」によって「論証」されないものは理解されないため⁸、「能動態—中動態」という文法は退けられ、「能動態—受動態」という文法が中心となった⁹。その結果、『『こころ』の空白』が生じその空白を埋める道として「東洋的なものへの回帰」が起きたと見る¹⁰。さらに重要なことは、詳細な説明を施していないが、高橋は、マタイ福音書の「ぶどう園で働く労働者」の譬え (マタイ 20:1-16) は「合理的な論理」では説明できず、ヨハネ福音書のイエスと神との「主客合一の形」(ヨハネ 14:11) も「二項対立の論理」

では説明できないとし、いずれの場合も中動相の文法によって理解されるものと主張している¹¹。

では、新約聖書ではどの程度に中動相が用いられているかと言うと、例えば、ロマ書 16 章には動詞が 35 回用いられているが、中動相はその内の 5 回の 14% であって、新約聖書全体では非常に多く用いられると言えよう。

このように、中動相は「退けられる」べきものではなく、却って非常に重要なものであり、欧米のキリスト教理解を通して学んできた我々にとって、中動相の文法とはどのようなものであるかを改めて確認する必要があると言えよう。そこで、まず、中動相の文法を記述し、次いで、中動相の解釈として、パウロにとっての中心的なメタファーの 1 つとして「奴隷」に焦点を当てて具体的に中動相にはどのような意味が込められているかを検討する。

解決への方法論としては、翻訳を含めた英語文献を中心に、古典的テキストとして重視されてきた古典ギリシア語の文献と新約聖書ギリシア語のテキストに当たり、加えて、現代の文献に当たることによって、中動相の文法を全体的に把握し、その上で、聖書の具体的なテキストの解釈の実例としてコリント信徒への手紙一 9 章 19 節から 23 節をテキストとして、パウロの用いるメタファーに見られる中動相の解釈を行うことで、中動相の理解が聖書テキスト解釈にもたらす意義を検証したいと思う。

2. 中動相の文法

まず、定義から始め、続けて、全体的に把握し、その上で、解釈上重要な問題となる点を扱うことにする。

(1) 中動相の定義

中動相は相 (voice) の 1 つで、相は「主語の行為ないし状態」¹² に関するもので、元来は能動相と中動相だけで、両者が対をなしたが、実体に即する定義は容易ではない。時代を追って見ることにする。

まず、ドイツ語圏における新約聖書ギリシア語研究の古典的存在とも言われ英語圏にも影響を与えた Friedrich Blass (1843-1907) によると、新約聖書のギリシア語と古典のギリシア語とも、概して同じ過程を経ており、当時の人々は個々の動詞につき高い頻度である種の恣意性によって「たぶんこちらがより適切であろう」と他の相の選択肢を消去し、「一つの特別

な意味にとってはこちらあるいはあちらの相」という具合に「定着した一般に認められた形」へ形成されて行った。各相にとっての一般的概念に至ることの困難さの原因はここに潜んでいるという。つまり、ある場合には、他の相が相応しいと思われる用い方もなされているということである。Blass は、能動相とは他動的なものであるが、すべてが行為ではなく状態を意味する場合もあるとし、中動相とは主語への言及を伴う他動的なものであって、受動相とは自動的なものであるとしている¹³。

これに対して英語圏において、注目され多く引用されているのは James H. Moulton (1863-1917) である。Moulton は、歴史的には、能動相と中動相だけが あった時代へ遡り、サンスクリット語、ラテン語、ギリシア語を調べ、能動相に混乱はないとし、意味上、能動相は「他者のための言葉 "a word for another"」であるのに対して中動相は「自分自身のため "for oneself"」のものであるとしている¹⁴。具体的に両者の区別として、「彼は赦す」を例に挙げ、主語の「彼は」を強調すれば中動相となり、動詞の「赦す」を強調すれば能動相となると説明している。ここに、中動相の ἀφίεται が能動相の ἀφίησι かに分かれる分岐点があるという¹⁵。しかし、Blass と同様に Moulton も、新約聖書においては、中動相と能動相との相当な混乱が見られ、この事態が起きるのは、相の相違を意識する言語学的感覚が鈍化していたことによるとしている¹⁶。

注目すべきことは、Moulton が、従来の文法家によって中動相とは本質的に再帰的である (essentially reflective) と説明されてきたことに対して¹⁷、従来のこの説明はかなり不正確であると批判している点である。彼の批判するところによると、確かに、実際、キリスト教以前のパピルスには再帰的中動相が多く見られたが、しかし、ヘレニズム時代のギリシア語では再帰的考えを表現する方法としては、再帰代名詞や人称代名詞を伴う能動相の動詞が用いられている。そもそも中動相というものは、理論的に、動詞の表現する行動に主語が全体として関わるものであり、例えば、I コリント 6:11 に見られる ἀπελούσαθε (あなたは洗われた、つまり、洗ってもらった) のように、全体としての主語が何らかの特別な関係を有していることを表現する。そこで、単に再帰的意味であるならば再帰代名詞や人称代名詞を伴う能動相の動詞を用い得ることにより、著者にとって中動相か能動相かの選択は常に意義あるものであるというのではなくって

る。実際、新約聖書では再帰的な中動相は比較的稀である¹⁸。

続いて広く影響を与えたのは A. T. Robertson (1863-1934) and W. Hersey Davis (1920-1948) である¹⁹。Robertson によると、相とは行動ないし状態を主語に関係づけるものであるが、その内、能動相は、主語を単に行動しているものとして表現する。ここから、能動相が最も古いと推測がつくが、受動相がない時代に、中動相がその変形として誕生したかその逆かは定かではなく、動詞ごとに異なる。いずれにせよ、動詞の中には、ある時制では能動相だけが存在したとか、あるいは、中動相だけとか、受動相だけが存在したというものがあって、多くの動詞は不完全である。そのような中で、中動相の代わりに、能動相が再帰代名詞と共に用いられている場合があらわれている。次に、能動相と異なり、中動相は、特別な注意を主語に向けるものとしての特徴を持っている。しかし、その特別な注意が動詞のいかなるものを指しているのかということに関しては、動詞自体を辞書で調べればその指しているものが何かを同定できるというのではなく、中動相を用いることによって強調されている考えの意味合いを理解する必要がありそのために、中動相の動詞の一つずつを調べ能動相が再帰代名詞と共に用いられる場合との正確な差を見ていく必要がある²⁰。

これまで新約聖書ギリシア語の分野での紹介であったが、古典ギリシア語の領域で基本とされているのは Herbert W. Smyth (1857-1937) である。Smyth によると、能動相とはその動詞の行為を行うものとして主語を表現するものである。他動詞の行為は、目的語に直接向けられているが、自動詞の行為はそうではなく、主語に関する行為に限定されていたり、直接でない事柄によって規定される行為（例えば、ἀλγῶ τοὺς πόδας 私は足に痛みがある）、あるいは、前置詞によって規定されていたりする行為である²¹。

中動相とは、行為が主語に対して特別な言及 (special reference to the subject) を伴って行われることを明らかにするものである。すなわち、主語が関心を抱いている事柄を行っているものとして主語を表現している。その場合、自分自身のために (for)、あるいは、自分自身に対して (to) 行う場合もあれば、自分自身に属しているもので (with) 行動する場合もある。中動相の目的語には、(1) 自分の所有にあるもののように、主語の領域に属する場合 (自分の手を洗う)、(2) 主語の領域にもたらされる場合 (人を呼

びにやる)、(3) 主語の領域から取り去られる場合 (自分の家を売る) がある²²。

このような流れの中で1950年代に、Blass, Moulton, Robertson らの新約聖書ギリシア語テキストを踏まえた定義を H. E. Dana と Julius R. Mantey が単純化した。Dana らによれば、相 (voice) は動作主 (the agent) が行動 (Action) に対してどのような関係にあるかによる区別である。そして、相は行為の主語 (subject) に対する関係を見るものである。まず、能動相は主語 (subject) を行動の作り手 (producer of the action) として描く、もしくは、動詞によって表わされている状態を表現するもの (representing the state expressed by the verb) である。主語が何らかの行動をしているものとして動詞を表現することに、能動相のもつ意義がある。それに対し、中動相は、行動の結果を分かち合うもの (participating in the result of action) として主語 (subject) を描くものである。つまり、能動相が行為を強調するのに対し、中動相はその行動の動作主 (agent) を強調する。そこで、中動相は「行動する主語へ動詞を差し戻す」とか「特別な注意を主語に向けさせる」と言われたりする。Dana らは、定義を単純化する反面で、どのような原理も一つでもって中動相のすべてを包含できるものではないと主張する²³。

しかし、R. J. Allan によると、すでにこのような新しい面を切り開いたのは、ドイツ語圏で「無類」²⁴な詳説ギリシア語文法を著した Raphael Kühner-Bernhard Gerth である。Kühner らは、中動相とは、一つの行為表現であり、それは主語から出て再び同じもの (この主語) へ戻ってくる行為表現である、とする。そして、この主語から出て同じものへ再び戻ってくるという行為表現は、この主語だけ又は主語の領域にある目的語だけに限定して可能なものであると述べている。前者の例は、顔を洗う等であるが、後者の例は自分のために地を征服するというような場合とされている²⁵。

1970年代に、英語圏で Hardy Hansen と Gerald M. Quinn は、ドイツ語圏の Kühner-Bernhard Gerth が中動相の定義として主語だけでなく主語の領域にある目的語にも広げているように、同様な方向で主語に限定しない方向での定義づけを行っている。その際、Hansen らは、能動相および受動相に対比する分類的な仕方の中動相を定義している。すなわち、相において、能動相は、主語が行為を演じていること (be performing) が出来ることであり、受動相は、主語が

何らかの外部に存在する動作主から行為を受けていることができることであるのに対し、中動相は、ある特別な個人的な関与 (involvement) を伴って行為を演じることができていることである、と定義している。

この定義との関連で中動相の特徴をあげている。すなわち、中動相は、行為を演じることでは能動相と同じであるが、主語が、その行為に対して特別な関心 (interest) を抱いている点に特徴があるとする。つまり、Hansen によると、何らかの意味で (somehow)、行為は主語に返る (returns to) 点にある²⁶。中動相が動詞に与える最も共通な意味は、「自分自身のために何かを行うこと」(to do something for oneself) である²⁷。例えば、能動相である παιδεύω は「私は教育する」という意味に過ぎないが、その中動相である παιδεύομαι は「誰かを教育されるようにする」(cause someone to be educated) という意味となり²⁸、未来形直説法中動相である παιδεύσομαι ならば「私は自分自身のために教育するであろう / (誰かを) 教育されるようにするであろう」(I shall educate for myself / have (someone) educated) という意味になると説明されている²⁹。

しかし、中動相によって加えられるニュアンスは、動詞毎により異なるとする。つまり、定まったこれと言うことは出来ない訳である。例えば、ホーマーが兄弟を教育する行為を演じているだけならば能動相であるが、自分自身の隠れた動機のためにそのように行っているとか、あるいは、ホーマーが、個人的に自分の兄弟を教育する代わりに、誰かに彼を教育してもらっている (was having someone else educate him) という具合である³⁰。しかし、自分自身のためというニュアンスが特に強い例もある。例えば、能動相の φυλάττω は単に「護衛する」という意味だが、中動相の φυλάττομαι は「自分自身を守るために誰かを護衛する」という意味である。さらに意味が異なってくる例もあり、能動相である παύω は「止める」という他動詞としての意味だが、中動相である παύομαι は「(自分自身を) 止める、止まる」という自動詞としての意味となり、同様に、能動相である πείθω は「説得する」という他動詞としての意味だが、与格を伴う中動相である πείθομαι は「自分自身を説得する、従う」という自動詞としての意味となる³¹。中動相の動詞が属格を伴う場合もあり、その例として「持つ」を意味する ἔχω の中動形である ἔχομαι を見ると、τῆς αὐτῆς γνώμης ἔχομαι (私は同じ意見です I cling to the same opinion) があ

る³²。さらに、後に来るものが分詞か不定詞かで意味の異なる例として、「始める」を意味する ἄρχω の中動相がある。例として、ἀρξόμεθα τοῦτο ποιῶντες と ἀρξόμεθα τοῦτο ποιεῖν とがあげられている。分詞を伴う前者は一連の全体的行為の最初の行為 (the first of a series of actions) を始めるという意味であるのに対して、不定詞を伴う後者は全体として1つである行為を始めること (the beginning of a single action) を意味する。訳としても、「我々はこれを行うことによって始める」と「我々はこれを始める」という違いとなる³³。

21世紀になり、Rutger J. Allan が中動相だけをテーマとする本格的な博士論文としてまとめ、単著となっている。Allan は、古典ギリシア語の中動相についての研究において、元來は他動性 (transitivity) を備えていたが中動相に変換していったという推測を行う。すなわち、他動的出来事を原型と見る。具体的に「開ける」(open) という他動性を備えた動詞を見よう。a. 「彼はドアを開けた」、b. 「そのドアは非常に簡単に開いた」、c. 「そのドアは突然開いた」、d. 「そのドアは開けられた」という例では、a の文は「動作主」(agent、彼) が主語で、行為を受ける「被動者」(patient、ドア) が目的語であるということで、この動詞の相は能動相である。しかし、残りの3つの文 (bcd) は、被動者が主語として暗号化されているという共通な1点において、この原型から離れている。すなわち、いずれにおいても、「参加者」(participant) が「主語 (動作主)」として用いられるように予期されているにも拘わらず、動作主としての候補性がより少ない「被動者」(the patient) に優先されてしまっているのである。詳細にみれば、b と c の文は、元々は、能動相の文であったが、しかし、ただ被動者だけが参加者として表示されている。b の文の「非常に簡単に」という句は、その主語となった被動者 (ドア) の特質によってそのようになったという不特定の動作主の努力がほめかされている。c の文を見ると、動作主への暗示的言及は全体として欠如している³⁴。このように意味論的には、b 及び c のいずれも中動相の領域に属する。対照的に、これらの b c の文とは異なり d の文を見ると、他の受動相の文と同様に、動作主は特定されてはいないものの、動作主の努力 (efforts) は否定されない仕方 (definitely) 暗示されているのであり³⁵、この点で中動相と異なる。

この点を踏まえた上で、Allan は中動相の定義に関する考えとして先行的研究の分析を通して自説を定立

する。すなわち、まず、次に2つの点を主張する。1つは、中動相には、「主語に影響を与える」という意味での「受動相的意味」が含まれていることであり、もう1つは、「主語の関心」と言われている「間接的再帰的意味」が含まれることである³⁶。さらに、他の相との対比を行い、一方で、中動相と異なり能動相においては行為によって影響を受けるということで主語が特定化されることがないのに対し、他方で、中動相と同様に受動相においては、いずれの場合も行為によって主語が影響と受けるという点に共通性があると見る。そこから、中動相の徴 (a marker) とは、広い意味での「主語-受影性」(subject-affectedness³⁷)にあるという。このような検討を経て、一方において、主語は行為の影響を受ける被動者と同じようなものであり、受動相的、再帰的、さらに相互的中動相のいずれにもそのことが言えると共に、他方においては、主語が間接目的語と同じような影響を受けるという意味での主語への影響性の存在を見て取ることが出来るという³⁸。先行研究を踏まえたこのような思考過程を通して、結論として、中動相の全体を包摂する抽象的意味として「主語の受影性」を主張する³⁹。このように、Allanによれば、中動相とは主語の受影性があるものをいうことになる。

Allanは、中動相の意味論を説明するには原型的他動性 (prototypical transitivity) が適切であると主張する。原型的他動句を、次のように定義する。まず、動作主-主語が物理的行動を創始する。すると結果として、被動者-目的語へのエネルギーの転移が起きる。つまり、被動者-目的語はそのエネルギーを吸収し、それによって状態の内面的変化を経験する。これが原型的他動句である。すべてという訳ではないが、一般的には、原型的他動句に見られる動詞は能動相である。そこで、これに対する中動相というものは、「原型的他動性からのぶれ (departure)」を特性とするものであると定義できる。すなわち、原型的他動性とは逆に、主語は、何らかの方法で、出来事の効果を経験する。この効果は「物理的ないし精神的性質 (a physical or a mental nature)」を有するものであり、その効果は直接的であったり間接的であったりするものである⁴⁰。要約すれば、Allanによれば、中動相とは、原型的他動性からのぶれを特性とするものであるし、主語の受影性はこのぶれによるものであると行うことであろう。

以上のことを検討すると、Blassは、能動相とは他動的なものであるが、中動相とは主語への言及を伴う

他動的なものであるとした。つまり、主語への回帰に着目した。これに対し、Moultonは、意味論的視点から、能動相は「他者のための言葉 “a word for another”」であるのに対して中動相は「自分自身のため “for oneself”」のものであるとした。つまり、能動相が他者へ影響を与えるものであるのに対し、中動相とは自分自身に影響を及ぼすものである。そこで、必ずしも、再帰的である必要はないとした。さらに、Robertsonらは、能動相は、主語を単に行動しているものとして表現するものであるとし、この点で最も古い相と推測するが最終的には動詞ごとに判断することが必要であるとした。中動相は、特別な注意を主語に向けるものであるとし、その注意が動詞のいかなるものを指すかは中動相の各動詞自体に強調されている考えの意味合いの正確な差を見る必要があるとした。つまり、能動相とは主語の単純な行動性にあると見て、相の原型であると推測し、中動相とは動詞によって意味合いの異なる特別な注意の主語志向性を持つものであるとした。これまでの新約聖書ギリシア語の分野以外でSmythは、能動相とは、その動詞の行為を行うものとして主語を表現するものであるのに対して、中動相とは、行為が主語に対して特別な言及を伴って行われることを明らかにするものであって、その主語が関心を抱いている事柄を行っているものとして主語を表わしているものであるとした。そこで、自分自身のために (for) だけでなく、自分自身に対して (to) も、また、自分自身に属しているもので (with) 行動することも含めた。Danaらは、相 (voice) は動作主 (the agent) が行動 (Action) に対してどのような関係にあるかによる区別であるとし、能動相は主語 (subject) を行動の作り手、もしくは、動詞によって表わされている状態を表現するものとして描くものであるとし、中動相は、行動の結果を分かち合うもの (participating) として主語を描くものであるとした。つまり、能動相が主語の行為や状態を強調するのに対し、中動相は行動の動作主を強調するとした。これまでの振り返ると、中動相に関して、Blassが主語への回帰性を、また、Moultonが自身への影響性を取り上げたのに対し、Robertsonが能動相の原型性を推測した上で中動相における動詞による特別な注意の主語志向性を取り上げ、Smythが中動相における関心を抱く主語性を取り上げ、Danaらは、中動相における動作主の存在とこれらの行為の結果を分かち合うという英語の participating 概念を用いて定義を表現した諸点に、それぞれの特徴を見ることができよう。Kühnerらは、中動相とは、主語から出て再

び同じもの（この主語）へ戻ってくる行為表現であるとした。重要なことは、その際、「主語」の外に「主語の領域にある目的語」という句における「主語の領域」という表現を付け加えることによって、これまでに見た不統一な中動相の範囲の曖昧さを突き抜けて、その範囲をかなり明瞭にしていたと言えよう。Hansenらは、この定義を踏まえ、能動相および受動相に対比する分類的な仕方でも中動相を定義し、中動相とは、ある特別な個人的な関与を伴って行為を演じることができていることであると定義した。つまり、Kühnerらの言う「主語」と「主語の領域」とを包含する統一概念として「ある特別な個人的な関与」という表現にたどり着いたと言えよう。Allanの見解は、一方で、Robertsonが史的事実として推定した能動相の原型性を理論上の原型性に再位置づけすると共に、他方で、Kühnerらの統一的定義による前進を試みたものと言えよう。

そこで、本論文では、Allanの定義をもって、中動相の定義として論を進める。すなわち、第1に、中動相とは、原型的他動性からのぶれを特性とするものである。第2に、中動相の特徴は、主語の受影性にある。

(2) 中動相と他の相との関係

中動相の特徴は、他の相との関係をもって明らかになる。Blassによると、能動相が中動相に代わる場合がある。それは、強調点が主語への言及にある場合であり、能動相に再帰名詞が伴って用いられる。再帰的言及というものは文脈によって示唆されるもので、例えば、καταδουλοῦν（奴隷とされる）という動詞でIIコリント11:20に見られる、εἴ τις ὑμᾶς καταδουλοῖ（あなたがたはだれかに奴隷にされても）はその例である⁴¹。しかも、Blassによると、中動相には、能動相が予想される場所で用いられていることがよくある。その例として、καταλαμβάνεσθαι（見て取る）、πληροῦσθαι（満たす）、τίθεσθαι ἐν φυλακῇ（獄に入れる）があげられる⁴²。さらに、Blassによると、パピルスと新約聖書において、同じ文に同じ動詞の能動相と中動相とが見受けられることがある。また逆に、われわれが中動相を予想している箇所でも時には能動相が用いられていることがある。特に、(κατα-)δουλόωが正にその例である（使徒7:6、Iコリ9:19、IIコリ11:20、ガラ2:4、IIペト2:19）。その理由は、いずれも明確ではなく、他の多くの例でも同様であるとされている⁴³。

では、ここで中動相の特徴を明らかにするために、

能動相をどう説明するかであるが、単に、中動相とは異なり「主語—受影性の欠如」であると能動相を説明することはできない。Allanは、「欠如的対立」(privative opposition) というものであって、言い換えれば、主語—受影性の意味論的特徴に関しては中性なのであると説明する⁴⁴。その意味論的中性とは、いわば、動作主—主語にエネルギーが蓄えられたままで流出していない、従って、その内面的状態が何らの変化も体験しないままであることであろう⁴⁵。では、その意味を決める基準は何かというと、それは「文脈的中性」(contextual neutralization) というように、文脈であり、文脈によって意味が決まるといふことである。そこで、受動相的構文に用いられている場合もある。例えば、「死ぬ」という意味の(ἀπο)σθνήσκωが(ἀπο)σθνήσκω ὑπό というように「云々によって殺される」という受動的意味で用いられる例である。

では、先に見たように中動相が用いられてもよい主語の関心や利益に関する行為であるのに、能動相を用いる場合をどのように理解すべきであろうか。例えば、ἀρτοφάγουσι δὲ ἐκ τῶν ὀλυρέων ποιεῦντες ἄρτους（そして彼らは小麦から彼らが作ったパンを食べる）という句では、ἀρτοφάγουσιもποιεῦντεςも能動相であるが、パンは自分たちが食べるために作るものである。ここでのποιεῦντεςを検討してみると、ποιεῦντεςには、ἀπο ὀλυρέων ποιεῦνται σιτία（彼らは小麦から彼らのパンを作る）という句もあってそこでは中動相が用いられており、中動相が用いられて良いものであるにも拘わらず能動相を用いている訳である。言い換えると、中動相を用いることは義務ではなく能動相を用いることができるということである⁴⁶。このような理解を前提としても、重要なことは、能動相が用いられた場合との意味の違いであるが、例えば、αἰτεῖνとαἰτεῖσθαιとの比較で、能動形では、返還する意図でもって自分に与えられるように物事を求めることを想定しているが、中動相では、一般的に商取引(business transactions)の上での要求の場合に適用するものとされており、新約聖書はこの意味で用いている(マタイ27:20、58、マルコ15:8、43、ルカ23:23、25等)、という。つまり、新約聖書の著者は、両者の相の違いを「完全に保ち得た(perfectly capable of preserving)」と結論できるとする⁴⁷。

さらに吟味を重ねると、能動形の動詞には、生得的に自分のための行為としての中動相的意味をもつものがある。つまり、もはや中動相を使う意味がないことで能動相となっているものもある。その例は「食べる」

「(ドアを) 開ける」等で多い。あるいはまた、再帰代名詞を伴わない中動相を用いず、その代わりとして、能動形の動詞が与格の再帰代名詞 *αυτῷ* (自身のため) を伴って用いられる場合もある。これには、意味論上、再帰代名詞を用いて強調する意図が見られる⁴⁸。

(3) 能動相欠如動詞

能動相が欠如している動詞がある。これを能動相欠如動詞という。Moulton によれば、歴史的に、典型的な言葉としてはその基となった言語 (the parent language) では中動相として用いられていなかったにも拘わらず、ギリシア語においては中動相しか認められない語彙群である。これがギリシア語の動詞としては「独自のなもの the originals」であり、英語では eat, come, am に対応するもので「行動、惹起、状態 an action, an occurrence, or a state」を示す語彙群である。能動相欠如動詞は、受動相の形態を好み、新約聖書において、*ἀπεκρίθη* が約 195 回用いられている⁴⁹。

この点は Blass によると、他動詞的意味をもっている能動相欠如動詞には、受動的意味があるという。その受動相の変化のほとんどは能動相欠如動詞の変化と同じである。しかし、その受動相的意味は多くの場合、アオリスト形に見られ、アオリスト形においては、受動相であるのかそれとも能動相欠如動詞 (deponent) であるのかの見極めが可能である。未来形受動相の例には、ロマ 2:26 に見られる *λογισθήσεται* (みなされる)、マタイ 8:8 に見られる *ιαθήσεται* (いやされます) というものがある⁵⁰。

能動相欠如動詞に関して、Smyth によると、それが身体的ないし精神的行動 (感情や思考) を意味することがよくある。跳ねる、飛ぶ、踊る、行ってしまう (be gone)、見る、願う、見極める (perceive)、聞く、責める、推測する (conjecture)、考慮する (consider)、嘆くという例である⁵¹。Smyth も能動相欠如動詞が受動的力 (passive force) を持つ場合には、未来形とアオリスト形においては受動相の形 (the passive form) をとると述べている。例えば、*ἐβιάσθη* というアオリスト受動相の形をとる場合は「私は暴力を被った I suffered violence (was forced)」という受動的力をもつが、しかしそうではなく、*ἐβίασάμην* というアオリスト中動相の形ままであるならば、「私は暴力を振るった I did violence」という能動的意味となって、こちらは、かつては能動形 (an active form) であった時のままに留まっている訳である⁵²。

(4) 受動的な中動相と受動相

Moulton は中動相と受動相との関係に特に注意を払っている。その区別の説明の困難さの理由について、両者の区別は決して英語のように明確にはならないからであると述べている。その判別の困難さの例として、I コリント 15:28 に見られる *ὑποταγήσεται* の相は何かという問題を取り上げている。つまり、これは *ὑποτάσσω* 「服従する」という動詞の変化形であるが、「服従させられる be subjected」という受動相であるのか、それとも、「服従している be subject」という中動相であるのか、という問題である。「効果を強めるための中動相 middle in force」という表現もなされており、その解釈を取りたいが、それは決して、似ている名詞形の服従を意味する *ὑποταγή* と *ὑποταγήσεται* との相違を明瞭にする「再帰的な『自分自身を服従させる』reflective “subject himself”」というものを受け入れるからではない。「服従している be subject」は中立的であって両者を説明しており、それゆえに、そのいずれの解釈をとるかを決定するのは文脈である。ここでは、「徹底的にキリストに帰する積極性との一貫性」が文脈となっているという理由により、ロマ 10:3 においてと同様であって受動相である。同様なことは、マルコ 16:6 に見られる *ἠγέρθη* にも言える。コンコーダンスを一瞥すれば、*ἠγέρθη* は躊躇せず自動詞とされている。しかし、文脈が神の行為を強く強調しているのであれば、受動相として訳すことが正しいのである。つまり、どちらであるかを決定するのは、文法家ではなく釈義家である。果たしてギリシア語の話し手がそこまで区別をこだわっていたかは疑問なのであると述べている⁵³。

さらに、Moulton は、受動相の形態をとりながら、その意味が中動相 (middle) ないし能動相欠如動詞 (deponent) の意味である動詞を取り上げている。例えば、*αἰσχύνομαι ἠσχυρήθη* (見極める)、*γίνομαι ἐγειρήθη* (成る)、*δύναμαι ἤδυνήθη* (出来る) 等である。消滅しつつある中動相に代わり、受動相か能動相の形態を代用させるのは、ヘレニズムの一般的傾向である。例えば、*ἐβαπτίσθη* と *ἐβαπτισάμην* との解釈上の混乱状態を起こしたが、「自らに云々されることを許容する」という意味で用いられており、両相とも実質的には、同時に、自動詞的動詞になっており、中動相も受動相も「洗礼を受け」(使徒 9:18) という意味であって他の場合も同じである。新約聖書においてはかなりの進歩が見られ、例えば *ἠγέρθη* は受動相

であるのは形態だけであってまさに能動相的ニュアンスで復活を意味するものとして用いられている（マルコ 14:28、16:6、マタイ 27:64 等）と説明している。ἡγήθηと ἀνέστηとの違いは全くないのであって、父なる神の行為がそれ以上でもそれ以下でもないことが前提とされているのである、と述べている⁵⁴。

では、そもそも受動相とはどのようなものであるのか。能動相との比較で受動相が明らかになる。Blass は、能動相と受動相との交差的な用いられ方に言及し、自動詞の能動相が παράあるいは ὑπόを伴うことによって受動相の意味で用いられていることを指摘し、その例として、マタイ 17:12 に見られる μέλλει πάσχειν ὑπ' αὐτῶν（人々から苦しめられることになる）を挙げている⁵⁵。

Blass によると、受動相の文において、主語となる人は、能動相の文では属格ないし与格で表現されている人である。この場合、対格で表現されている事物は、受動相の文でもそのままである。その例として、ロマ 3:2 に見られる ἐπιστεύθησαν があり、πιστεύω τινί τι（誰かに何かを信頼して託す to have something entrusted to one）という能動相の文の与格のもの（τινί）を主語にし対格のもの（τι）はそのままに残している例である。受動相には、英語の “to let oneself” be 等で表現されるものがある。例えば、I コリント 6:7 に見られる ἀδικέισθε は、ある事柄が起きることを受容している（allowing it to take place）という意味で「不義を甘んじて受ける」（let yourselves be wronged）というの、その例である。同様に、βαπτίζεσθαι も「バプテスマを受けることを許す」（to let oneself be baptized）という意味であるが、これは「云々の状態になること、又は、云々することを許す」（to let）というものであるが、その結果との関わりで中動相によって表現される場合もある⁵⁶。

歴史を振り返るのは Robertson である。Robertson によると、受動相が遅れて登場してきたのは、様々な工夫を幾つかの動詞の能動相に加えたり、中動相の形式を受動相として用いたりしたことによる。実際、アオリスト形と未来形という 2 つの時制以外には、中動相の形ではない独自の形態は発展しなかった。つまり、他の時制では中動相と受動相は同じ語形のままに留まったということである。では、受動相とはどのようなものであるかということ、主語が行動をなすというよりは、主語の上に行為がなされ、その行為を受け取るというものである。しかも、行為を受け取るという

性質上、自動詞的であって、目的語を取らないのが普通である。しかし、やがて受動相がアオリスト形と未来形というたった 2 つの時制だけであっても独自の形態である受動形で表現され、中動相の機能を強奪したことで、中動相との対立的関係は解消した。すなわち、動詞によっては、逆に、受動相の形のまま中動相の意味を表現する機能もあることになったばかりか、受動的意味が全く消えていることもある。このような相の力というものは、歴史と文脈という実際の事実に照らして理解されるものである。この受動相の機能に関しては Smyth によると、受動相というものは、行動の作用を受けるものとして主語を表現するものである。受動相は中動相から生じたものである。いくらかの未来形とアオリスト形に例外はあるものの、中動相の形態は受動相としての働きもなす。例えば、αἰρεῖται には、「彼自身のために取る」、つまり、「選ぶ」と、それに、「選ばれる」という意味がある。受動相には、「allow oneself to be ままになる」とか「get oneself される」という意味合いがある⁵⁷。Dana によると、受動相は、行為を受け取るものとして主語を表示するように動詞を用いるものである、とされている⁵⁸。

これらを踏まえ、Allan は、受動的な中動相というものを説明する。それは、被動者が主語の地位（status）を割当てられているものである。動作主一参加者（an agent-participant）は概念的には存在しているが、実用的には重きを置かれていないことに、受動的な中動相の本質があるという。例えば、ὁ μὴ δαρεῖς ἄνθρωπος οὐ παιδεύεται（ムチで打たれた男は教育を受けていない）という文では、包括的意味で動作主である「ムチで打つ者」と「教育する者」が暗黙的なままとされている。しかし、外部で創始されている出来事を意味する δέρωと παιδεύωという 2 つの動詞の生得的な語彙の意味論によって、動作主の存在は意識されている。つまり、この中動相についての受動相的解釈は、主に、動詞の語彙の意味論に基づいてなされるのである。外部の動作主は全体として意識されないままであったり、原因を与えた参加者は究極的な創出者として思われたりする可能性を有している⁵⁹。

中動相と受動相との違いを見ると、中動相ではその動作主が動詞の過程に関わったりその影響を受けることによったりするのが常であることから動詞は中動相なのであるが、受動相においては動作主の状態の変化を伴うこともあれば伴わないこともあり得る。より詳しく説明すると、受動相においても、動作主に、その

状態の変化が起きることがある。つまり、その状態の変化とは、ある実在者がT1の時点ではある状態であるが、その状態がT2の時点であった状態とは異なる場合のことをいう。まず、状態の変化を伴わない例として、βάλλομαι (ὑπο) を取り上げると、「私は(何某によって)打たれている」ということであって、確かに「打つ」という行為を受けているが、では動作主の状態に変化が惹起したかと言うと、ひどく打たれたりしてケガや骨折をしていればその状態に変化を生じているが、単に打たれただけでは状態に変化は生じない。したがって、「私は打たれている」というのは、動作主の状態の変化を示しているものではない。というのは、その直接目的語はそれが打たれる前の状態とそれが打たれた後の状態と全く同じであるかも知れないからである。他方で変化を伴う受動相の動詞の例として、τῆκομαι (ὑπο) は「私は(何某によって)破壊されている (I am being destroyed (by))」という意味であるが、この場合は、ある状態にある変化が起きていることが必ず (necessarily) 暗示されている。この動詞の能動形はτῆκωで「溶かす」という意味であることが示すように、受動相において主語は固形である状態から液体である状態へ移る経験を経る。これ以外にも、状態の諸変化を示す受動相の動詞があるので、それらを見ると、ἀπολλύμαι (ὑπο) (私は(によって)破壊されている I am being destroyed (by))、ῥηγγύμαι (ὑπο) (私は(によって)壊されている I am being broken (by))、πείθομαι (ὑπο) (私は(によって)説得されている) 等がある⁶⁰。ただ、中動相との質的な違いは、先に見たように、中動相における「主語の受影性」が受動相には見られない点にあると言えよう。すなわち、受動相と同様に主語が影響を受けるが、一方では、主語の関心とも言われる「間接的再帰的意味」が含まれるだけでなく、主語が間接的目的語と同じような影響を受けることが主語の受影性であると言えよう。

同様に、受動相との違いが問題になるものに、Allan のいう精神変遷的中動相 (mental process middle) がある。これは、生命のある主語が精神的な受影性を経験するものである。つまり、ここでの受影性は、φοβοῦμαι (恐れる) という動詞の示す感情的なものであったり、μιμνήσκομαι (憶えている) や ἐπίσταμαι (知っている) という動詞の示す知覚的なものであったりする。精神的変遷は、時間的な経過による変化ではないが、精神的受影性は、外的刺激によってもたらされ得るのであり、この原因的刺激とな

る参加者 (participant) は属格、与格、さらに対格をとる。精神的変遷的中動相がある動詞には、その中動相に対応する使役対应的能動相 (an active causative counterpart) がある場合が多い。例えば、ἐλπιομαι (+対格) (望む) に対する ἐλπω (希望を抱かせる (cause to hope))、μιμνήσκομαι (+属格) (憶える) に対する μιμνήσκω (何かを人に思い出させる)、πείθομαι (+与格) (信じる、従う) に対する πείθω (説得する)、φράζομαι (考える) に対する φράζω (告げる) 等である⁶¹。ここでも問題は、かなりの数において、受動的意味も兼ね備えているために、解釈に当たって、中動相か受動相 (a true passive) かを判断し兼ねる場合が多いことであるが、しかし、Allan は、創出的動作主が受動相の場合よりもさらに背後に退いていることが多く、既定値的解釈として、真の受動相として判断する明確な指示的要素がない限りは、自動詞的な意味を持つ中動相として解釈することを提案する⁶²。つまり、中動相では、精神的経験者は強調され、刺激を与える側には実際に重きが置かれていない (pragmatically deemphasized)。そこでは、外的原因への言及がなく精神面での経験が表明されているのである⁶³。この点で注意を要することは、感情的な経験を表わす動詞は、創出する動作主とは異なって、例えば、心配をもたらす原因となるものは属格をとり、怒りをもたらす原因となるものは与格をとる。これらの場合は英語では about や with など表現される⁶⁴。

4. 中動相の理解は聖書テキスト解釈に何をもたらすか

本論では、I コリント 9:19-23 を取り上げて、中動相の理解が聖書テキストの解釈にどのような窓を開けることができるかを見ることにする。ここでは訳は新共同訳聖書によることとし、使われている動詞を見ると、能動相は、完了形の γέγονα (なりました) (22) と現在形の ὄν (です)、ποιῶ (します) (19, 23) を除いて、ἐδούλωσα (奴隷になりました)、κερδήσω (得るためです) (19, 20, 22)、κερδάω (得るためです) (21)、σώσω (救うためです) (22) はすべてアオリスト形であり、これに対して、中動相は、ἐγενόμην (なりました) (20, 22) と γένωμαι (なるためです) (23) であり、いずれもアオリスト形である。

まずすべての主語は、パウロである。次に、相の内 で能動相に関して見ると、能動相は行為自体に焦点が

ある。そこで、パウロが「自由である」こと自体、「奴隷となる」ということ、「なりました」(γένεγονα)ということ、「得る」つまり救うということ、さらに(どんなことでも)「する」ということ、これらの動詞には、その行為自体に焦点が置かれている。そこで、解釈としては、自由であること自体、奴隷となること自体、なりましたということ自体、得るという救うこと自体、そして、どんなことでもするという場合のするという行為自体について、その意味を明らかにすることが解釈の作業となると思われる。

これに対して、中動相を見ると、動作主一受影性が重要なのであるから、「なる」という行為に焦点があるのではなく、その「なる」という行為がパウロ自身に影響を及ぼすこと乃至パウロの関心がテーマとなっており、そのパウロへの影響とパウロの関心とは何かを明らかにすることが解釈の作業となると思われる。

一つの問題は、能動相の γένεγονα と中動相の ἐγενόμην と γένομαι とはギリシア語の原形が γίνομαι であり、これが能動相欠如動詞である点で意味が異なるかという点である。

これに関しては、Gary A. Long が能動相欠如動詞である γίνομαι に関して、次のように述べている。これは、自発的出来事の中動相 (spontaneous event middle) であって、その「意味」(meaning) は、「通常にみられる」(regularly) 中動相の意味であって、能動相の意味ではない。多くの聖書ギリシア語文法書が「deponent」(能動相欠如動詞)という用語を用い、形態は中動相ないし受動相であるが意味は能動相 (the active) であると主張している (claim)。しかしこれらの動詞は、能動相的形態を脇に置いた動詞ではなく、中動相なのである。すなわち、中動相の形態を適切にまとわされた中動相動詞の変遷を伝える動詞なのであると説明している⁶⁵。

能動相は、行動に注目し、行動の結果が動詞の目的語にどのような効果を及ぼしたかを明らかにする⁶⁶。すでに見たように、中動相では行動ないしその結果が何らかの意味で動作主に返って来るものである。Robertson が指摘しているように、能動相欠如動詞の意味は、その都度、解釈する必要がある⁶⁷。その解釈の強調点は、何らかの意味で再帰的であるが、主語が行為の動作主であり、その主語が解釈の重力の中心に位置していることにある。つまり、能動相とは異なり、行為は動作主を素通りしないのである。例えば、拳闘なら、主語がその行為に関わり続けなければ意味をなさないと同じである。そこで、能動相欠如動詞にお

いては、動作主がどのように行為に関わり続けるかを明らかに見る必要がある⁶⁸。つまり、パウロがどのように中動相の ἐγενόμην と γένομαι とによって、その行動に関わり続けたかを明らかにすることが解釈の課題となるといえよう。言い換えると、能動相の γένεγονα の解釈としては、完了形であるから行為の結果として「なった」状態が継続しているということに意味があるが、中動相の ἐγενόμην と γένομαι とにおいては、その「なる」という行為の結果が自分に返って来るように関わり続けたことを意味しており、その内容を明らかにすることが解釈の中心的事柄となると言えよう。しかも、この中動相の意味として、動作主であるパウロの全体的な関心は何であるかという点、「わたしが福音に共にあずかる者となる」(23) ことであろう。

このように見てくると、能動相で書かれている「すべての人に対してすべてのものになりました」ということにおいては、そうなった結果が現在まで続いているという行為とその結果に力点があるが、残る3つの中動相の場合には、その「なる」ことに関してそうなり続けている動作主のパウロに注目が行くのであり、しかも、「ユダヤ人のようにになりました」、「弱い人のようにになりました」、「わたしが福音に共にあずかる者となる」という句には、この動詞を省略している「律法を持たない人のようにになりました」という事柄以上の関心の高まりがあるとも読めるのではないと思われる。そのように見ると、人々のためという倫理的意味で読むことが求められているというよりは、「わたしが福音に共にあずかる者となる」という信仰者であるパウロ自身の自己アイデンティティ的存在のあり方についての意味をもって、この箇所全体は解釈されることを求めていると言えよう。このような意味で後続の24節以下に直結することが明らかとなると思う。

5. むすび

新約聖書はギリシア語で書かれているが、動詞の活用の相には能動相 (active)、中動相 (middle)、受動相 (passive) の3つがあるが、中動相は「ギリシア語に独特な相」であることから、「中動」(middle) という用語には何ら特別な意味はないとすらされてきた。しかし、その原因は「個人、人格、自由、責任」を前面に出すヨーロッパの思想・言語にとって、中動相の文法が論理的に曖昧と受け取られ、主語・述語、主観・客観の合理的な論理によって「論証」されない

ものは理解されて来なかった結果にすぎない。

改めて、中動相も、背後にある歴史を振り返り、他の相との比較における特徴を浮かび上がらせたとき、中動相に固有の意味論的意義が認められる。それは、動作主の受影性である。この意味論的意義を実現する方法として、中動相には原型的他動性からの「ぶれ」があり、このぶれこそが中動相の命であり、かつまた、それが西欧の合理的論理に中動相を馴染み難いものとしていると言えよう。

しかし、パウロの当該テキストに関して、相の違いを意識してテキストを読むだけでも、テキストの意味は異なってくる。中動相の重要性と、それを認識し中動相を理解してその視点からテキスト解釈に臨むことの意義を明らかにすることを試みたが、今後は、欧米諸国の聖書解釈や神学を学んできたわれわれにとって、どこまで中動相の力に迫ることができるかがわれわれ聖書を読む者の課題であると思う。

文 献

- 1 大貫隆『新約聖書ギリシア語入門』岩波書店、2012年、7。
- 2 R. T. Robertson and W. Hersey Davis, *A New Short Grammar of the Greek Testament: For Students Familiar with the Elements of Greek*, New York and London: Harper & Brothers Publishers, 1933, 288.
- 3 Ray Summers, *Essentials of New Testament Greek*, Nashville: Broadman Press, 1950, 38.
- 4 H. E. Dana and Julius R. Mantey, *A Manual Grammar of the Greek New Testament*, New York: Macmillan Publishing, 1955, 156.
- 5 國分功一郎『中動態の世界—意志と責任の考古学』、医学書院、2017年。
- 6 高橋勝幸『『中動態の世界』によって見えない隠れた世界は捉えられたか』『南山宗教文化研究所研究所報』第27号、南山宗教文化研究所、2017年、31注1。
- 7 高橋『『中動態の世界』によって見えない隠れた世界は捉えられたか』、39。
- 8 高橋『『中動態の世界』によって見えない隠れた世界は捉えられたか』、36。
- 9 高橋『『中動態の世界』によって見えない隠れた世界は捉えられたか』、40。
- 10 高橋『『中動態の世界』によって見えない隠れた世界は捉えられたか』、39は、同見解として國分功一郎、木村敏の名をあげる。國分『中動態の世界』、214-215
- 参照。
- 11 高橋『『中動態の世界』によって見えない隠れた世界は捉えられたか』、36、41。
- 12 Robertson and Davis, *A New Short Grammar of the Greek Testament*, 287.
- 13 Friedrich Blass, *Grammar of New Testament Greek*, tr. H. St. J. Thackeray, New Delhi: Isha Book, 2013, first published in 1898, 180.
- 14 James H. Moulton, *A Grammar of New Testament Greek, Vol. I Prolegomena*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1906, 152.
- 15 Moulton, *Prolegomena*, 152.
- 16 James H. Moulton, *A Grammar of New Testament Greek, Vol. III. I Syntax*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1906, 54-56.
- 17 Moulton, *Prolegomena*, 155.
- 18 Moulton, *Syntax*, 54.
- 19 Robertson の *A Short Grammar of the Greek New Testament* は、1908年に出版され、イタリア語（1910年）、ドイツ語（1911年）、フランス語（1911年）、オランダ語（1912年）に翻訳されている。
- 20 Robertson and Davis, *A New Short Grammar of the Greek Testament*, 288-290.
- 21 Herbert W. Smyth, *Greek Grammar*, rev. Gordon M. Messing, Cambridge: Harvard University Press, 1963, 389. 初版は、1920年である。
- 22 Smyth, *Greek Grammar*, 390.
- 23 H. E. Dana and Julius R. Mantey, *A Manual Grammar of the Greek New Testament*, New York: Macmillan Publishing, 1955, 155-157.
- 24 Rutger J. Allan, "The Middle Voice in Ancient Greek: A Study in Polysemy," (Ph.D. diss., University of Amsterdam, 2002), 10, <https://pure.uva.nl/ws/files/3546000/23754> Thesis.pdf. なお、Brill Academic Pub. から2003年に出版されている。
- 25 Raphael Kühner-Bernhard Gerth, *Ausführliche grammatik der griechischen sprache, Band I*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1966, 374.
- 26 Hardy Hansen and Gerald M. Quinn, *Greek: An Intensive Course*, New York: Fordham University Press, 2014, 43.
- 27 Hansen and Quinn, *Greek: An Intensive Course*, 163.
- 28 Hansen and Quinn, *Greek: An Intensive Course*,

- 168.
- 29 Hansen and Quinn, *Greek: An Intensive Course*, 44.
- 30 Hansen and Quinn, *Greek: An Intensive Course*, 44.
- 31 Hansen and Quinn, *Greek: An Intensive Course*, 168.
- 32 Hansen and Quinn, *Greek: An Intensive Course*, 505.
- 33 Hansen and Quinn, *Greek: An Intensive Course*, 402.
- 34 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 9.
- 35 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 10.
- 36 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 11.
- 37 英語の affectedness の訳には、「受影性」(峰岸真琴)と「影響性」(永田高志)という訳が見られるが、影響を受けるという意味に照らし峰岸訳による。峰岸真琴「アジアの視点からの言語学を目指して: タイ語研究を例に」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』No.9 (2012)、207、及び、永田高志「身体部位表現の言語学」『文学・芸術・文化』20 卷 1 号 (2008.9)、164.
- 38 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 12.
- 39 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 13.
- 40 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 13.
- 41 Blass, *Grammar of New Testament Greek*, 183.
- 42 Blass, *Grammar of New Testament Greek*, 186.
- 43 Moulton, *Syntax*, 54-56.
- 44 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 13.
- 45 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 6.
- 46 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 17.
- 47 Blass, *Grammar of New Testament Greek*, 186.
- 48 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 18.
- 49 Moulton, *Syntax*, 54.
- 50 Blass, *Grammar of New Testament Greek*, 184.
- 51 Smyth, *Greek Grammar*, 393.
- 52 Smyth, *Greek Grammar*, 395.
- 53 Moulton, *Prolegomena*, 162-163.
- 54 Moulton, *Syntax*, 56-57.
- 55 Moulton, *Syntax*, 53.
- 56 Blass, *Grammar of New Testament Greek*, 185.
- 57 Smyth, *Greek Grammar*, 394.
- 58 Dana and Mantey, *A Manual Grammar of the Greek New Testament*, 155-157, 161.
- 59 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 41-42.
- 60 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 42.
- 61 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 46-47.
- 62 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 48.
- 63 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 50.
- 64 Allan, *The Middle Voice in Ancient Greek*, 52.
- 65 Gary A. Long, *Grammatical Concepts 101 for Biblical Greek: Learning Biblical Greek Grammatical Concepts through English Grammar*, Peabody: Hendrickson Publisher, 2006, 106.
- 66 Neva F. Miller, "A Theory of Deponent Verbs," Appendix2 in *Analytical Lexicon of the Greek New Testament*, Timothy Friberg, Barbara Friberg, and Neva F. Miller, Victoria, Canada: Trafford Publishing, 2005, 423.
- 67 Miller, "A Theory of Deponent Verbs," 425.
- 68 Miller, "A Theory of Deponent Verbs," 426.

A Biblical Interpretation from the Perspective of the Middle Voice

Takayasu Furukawa

< Abstract >

The New Testament is written in Greek, in which are three kinds of voice: active, middle, and passive. The middle voice has been nearly neglected in western Christendom, due to the inability to understand it according to its rational way of thinking. Tracing back the linguistic history behind the voice, the writer examines major figures in the field of Greek grammar, New Testament Greek and classic Greek. Then, the writer presents some key terms and their meanings to explain the middle voice. After presenting a way of understanding the middle voice, the writer shows an example of biblical interpretation from the perspective of the middle voice.

Keywords: middle voice, prototypical transitivity, agent, affectedness, patient

